

博士学位論文審査要旨

申請者：岸 圭介（きし・けいすけ）

（早稲田大学系属早稲田実業学校初等部教諭、

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程教科教育学専攻4年）

論文題目：国語科教育におけるマンガ教材の選定・開発をめぐる探究

—藤子・F・不二雄『ドラえもん』の意義と可能性—

申請学位：博士（教育学）

課程内外：課程内

審査員：主査 町田 守弘 早稲田大学教育・総合科学学術院教授 博士（教育学）

副査 幸田 国広 早稲田大学教育・総合科学学術院教授 博士（教育学）

副査 佐藤 隆之 早稲田大学教育・総合科学学術院教授 博士（教育学）

副査 秦 美香子 花園大学文学部教授 博士（学術）

1 論文の目的と方法

① 本論文の目的

本論文の目的は「国語科教育においてマンガ教材を活用する意義を明らかにすること」にある。多面的にマンガというメディアの実相を捉える研究によって、マンガ教材を効果的に活用するための基礎的な枠組みを提示することを目指すものである。

先行研究においては学力論・評価論との関連をマンガの教材化をめぐる重要課題と位置付けていることから、本論文では先行研究が提起する問題意識を発展的に継承し、「国語科教育に関わる資質・能力は、マンガ教材をどのように扱うことで育成できるのか」という問題意識を中核に据えた研究課題を設定した。

この課題を解決するに当たっては、国語科教育の視座からのマンガの教材選定・教材開発における方法論の構築が求められることになる。そのため、一定の教育的効果を担保するマンガ教材を活用した国語科授業デザインの開発を本論文の到達点として設定した。

② 本論文の方法

本論文ではマンガ教材に関する理論的側面と、マンガ教材を通じた学習者の心情に関わる実践的側面の二つのアプローチからの分析を試みている。

各章ごとに主な研究方法を確認すると、まず第3章から第5章までは「理論編」に相当する。第3章においては、主に史的研究の視座から読書観の変遷を分析した。マンガが社会に浸透するに伴い、人々の読書観にどのような影響を与えたかを明らかにする。第4章では学習者に必要なマンガ教材の選定基準を定め、固有のマンガ作品が教育環境として機能している実情を分析する。第5章では主にマンガ研究の視座から、文学作品に近接するマンガの読解技能の実相について分析する。マンガと文学作品との往還に関わる知見は、マンガに関わる教材性の理解につながる。総じて第4章・第5章は、広く国語科教育におけるマンガ教材研究として位置付けることができる。

第6章・第7章では学習者研究の視座から、マンガ教材で学んだ学習者の心情を分析対象とする。第6章では、マンガ教材を活用した国語科授業を手がかりとして、学習者の関心・意欲が高まる具体的な誘因について分析をする。関心・意欲を高める媒材の実相を可視化して明示をすることを試みた。第7章では、マンガと物語、説明文との読解過程に関わる構成要素の共通点と相違点を分析する。国語科授業という文脈において、どのようにマンガ教材が読まれるかという事実の解明は、マンガ教材研究の重要課題であると言える。マンガを読む際に、蓄積された文字テキストの読書経験がどのように活かされるのかを明らかにする。

第6章・第7章の学習者研究では、目的や分析の方向性に合致する方法論として、国語教育研究でも主要な分析手法として用いられている質的研究法を援用する。その主な理由は、第一に理論構築につながる仮説生成を目的とした研究手法である点である。対象とする研究の範疇で知見として築かれていない仮説モデルを構築することで、これまで可視化されてこなかった特定事象の構造を学術的な見地から提示することが可能となる。国語教育研究の分野におけるマンガ教材研究はまだ萌芽的な段階であり、本論文の目的に合致する先行モデルは見当たらないという理由から、質的研究を援用する必要があると判断した。第二に、学習者の心情面の分析に優れた研究手法である点である。例えば、マンガ教材を用いた授業に対してどのような感情を抱いたかという心情の機微は、簡単に数値化できない問題を孕んでいる。学習者における学びの経験に関わる質的分析によって、マンガ教材の導入にどのような教育的意義が存在するのかを明らかにできると考えた。

2 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

はじめに

第1章 国語科教育におけるマンガ教材研究の視座

第1節 「学びの一元化」という観点

1.1 児童文化と学校教育を接続する意義 / 1.2 マンガ読書をめぐる「主体性」の問題 / 1.3 マンガ読書の実態とリテラシー教育の必要性

第2節 国語科教育におけるマンガ教材研究の方向性

2.1 マンガ教材研究における「知識・技能」の問題 / 2.2 PISA 読解力調査の結果に見るマンガの教育的可能性 / 2.3 「マルチモーダル・テキスト研究」の現代的展開 / 2.4 マンガ教材研究における中核的な研究課題 (Research Question)

第3節 国語科教育におけるマンガ教材研究の基本的枠組み

3.1 国語教育研究とマンガ研究との往還 / 3.2 マンガ教材研究で照射すべき二局面

3.2.1 児童文化における「読書観」の変容 / 3.2.2 国語科授業のプロセスから考えるマンガ教材分析の観点

第4節 国語科授業場面におけるマンガ教材研究の四観点

4.1 マンガ教材の選定基準と「固有性」の問題 / 4.2 マンガ理論に基づく「教材性」の分析と教材化の手立て / 4.3 マンガ教材をめぐる「関心・意欲」の所在 / 4.4 「マンガ・リテラシー」と読解力との相関性

第5節 本研究を貫く研究構想図

5.1 本研究の目的 / 5.2 本研究における六項目の研究課題

第2章 本研究における研究方法

第1節 研究方法の方向性

1.1 学習者の必要感に基づく教材選択 / 1.2 「機能的教材」の解明という視座

第2節 「媒材」の視座に基づく多面的研究の必要性

2.1 国語教育研究における「教材・学習材論」の史的潮流 / 2.2 媒材による「動的な「はたらしき」という影響

第3節 国語教育研究における質的研究の有効性

3.1 「学習者研究」における質的研究 / 3.2 「質的研究」の特性 / 3.3 国語教育研究の動向に見る「質的研究」の隆盛

第4節 本研究における分析手法

4.1 「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach)」の援用 / 4.2 質的研究法における「客観性」の問題 / 4.3 メタ理論「構造構成的質的研究法 (SCQRM : Structure-Construction Qualitative Research Method)」の必要性 / 4.4 分析対象と分析データの確保

第3章 「消費的読書観」に基づくマンガ教材開発の方向性

第1節 研究の背景

1.1 メディア間における「読むこと」の相互性 / 1.2 メディア変遷の影響による「読書観」の変容の問題 / 1.3 分析の方法

第2節 1970年代に見る「読書観」の変容

2.1 国語教育研究における「読むこと」の定義の拡張 / 2.2 メディア発展に伴う新たな読書観の萌芽

第3節 児童文化における「消費的読書観」の醸成

3.1 子ども向けの「名作」に見る読書観の実態 / 3.2 マンガ読書による「消費的読書観」の促進

第4節 現代社会における「消費的読書観」の蔓延

4.1 情報のデジタル化における「消費的読書観」の広がり / 4.2 「不読者」と読書の動機付けの関係性 / 4.3 デジタル化が進むマンガ読書

第5節 「消費的読書観」に向き合う国語教育の方向性

5.1 「遅い情報」の現代的価値 / 5.2 「熟考する過程」の必要性 / 5.3 「予見性」を育成する教材化の手立て

第6節 本章のまとめ

第4章 マンガ教材の選定基準と「固有性」の問題—藤子・F・不二雄『ドラえもん』の教材性—

第1節 研究の背景

1.1 国語教育史におけるマンガ教材の変遷 / 1.2 マンガ教材に関わる選定基準の必要性 / 1.3 分析の方法

第2節 4象限マトリクスを活用した「マンガ教材選定基準」の構築

2.1 町田 (1995, 2014, 2015) の言説に見る教材選定眼 / 2.2 ポジショニングマップによる「マンガ教材選定基準」の分析

第3節 児童文化との接続をねらった「マンガ教材選定基準」

3.1 児童文化におけるマンガ読書の特性 / 3.2 「娯楽性」を基軸とするマンガ教材化への課題

第4節 学習者と「ドラえもん」の親密性

4.1 児童文化における「ドラえもん」の浸透度 / 4.2 教育環境としての「ドラえもん」の機能 / 4.3 学校教育における『ドラえもん』の活用事例

第5節 『ドラえもん』教材の固有性

5.1 マンガ・リテラシー育成のための基礎・基本 / 5.2 「話型」を学ぶための類型的な構造

第6節 初等教育における『ドラえもん』の授業実践

6.1 キャラクターに「なりきること」を通じた学び / 6.2 初等教育におけるマンガ活用の方向性

6.2.1 マンガ教材活用の実例 / 6.2.2 学習者の感想から見えるマンガの教育的可能性

第7節 本章のまとめ

第5章 文学作品に近似するマンガの「教材性」の実相

第1節 研究の背景

- 1.1 マンガと文学作品の読解技能における近似性 / 1.2 「関係構築力」に見る読解過程の近似性 / 1.3 分析の方法

第2節 教材開発に向けたマンガ理論からの示唆

- 2.1 グルンステン（2009）による理論の枠組み
 - 2.1.1 「図像的連帯性」というコマの連なり / 2.1.2 「関節論理」としての物語性
- 2.2 マクラウド（1998）による理論の枠組み
 - 2.2.1 コマ間の意味を生成する「補完」効果 / 2.2.2 キャラクターのデフォルメ化による「同化」効果

第3節 国語教育研究の知見に見るマンガと文学作品の近似性

- 3.1 「関節論理」を有する構造の近似性 / 3.2 「視点人物」における近似性 / 3.3 マンガにおけるメディア特有の読解技能 / 3.4 「中心人物の変容」に関わる近似性 / 3.5 読者における「主題創造」としての近似性

第4節 本章のまとめ

第6章 国語科授業場面におけるマンガ教材が誘発する「関心・意欲」の諸様相

第1節 研究の背景

- 1.1 マンガ教材と「関心・意欲」の相関を示す研究の方向性 / 1.2 マンガ教材が誘発する「関心・意欲」の実相の解明

第2節 研究の概要

- 2.1 授業の概略
 - 2.1.1 対象者 / 2.1.2 マンガ教材 / 2.1.3 教材観 / 2.1.4 ねらいと教材化の手立て / 2.1.5 授業の展開
- 2.2 研究方法
 - 2.2.1 質的研究法 / 2.2.2 質問紙調査

第3節 分析の結果

- 3.1 【関心・意欲を向上させる誘因】に関わるカテゴリと概念
 - 3.1.1 【マンガ教材の諸特性】
 - 3.1.1.1 【文化的特性】 / 3.1.1.2 【内容的特性（固有性）】 / 3.1.1.3 【構造上の特性】
 - 3.1.2 【授業展開の工夫】
- 3.2 【既習事項と往還した学び】に関わる概念 / 3.3 【学習者の変容】に関わる概念

第4節 モデル図の生成と考察

- 4.1 マンガと学校文化との対峙と融和 / 4.2 マンガの構造特性による学習の促進 / 4.3 マンガの世界観とキャラクターに抱く情感 / 4.4 マンガ教材の活用による「読書観の変容」の示唆

第5節 本章のまとめ

第7章 学習者の省察に基づくマンガと連続型テキストの読解における構成要素の同異

第1節 研究の背景

- 1.1 認知発達心理学分野におけるマンガ研究の方向性 / 1.2 マンガと連続型テキストを結ぶ読解要素の解明

第2節 研究の概要

- 2.1 授業の概略
 - 2.1.1 対象者 / 2.1.2 マンガ教材 / 2.1.3 教材観 / 2.1.4 ねらいと教材化の手立て / 2.1.5 授業の展開
- 2.2 研究方法
 - 2.2.1 質的研究法 / 2.2.2 質問紙調査 / 2.2.3 事前分析による「読みの傾向」の把握

第3節 分析の結果

- 3.1 【マンガの読解要素】に関わるカテゴリと概念

3.1.1【マンガ特有の読解要素】に関わる概念 / 3.1.2【マンガ・物語・説明文共通の読解要素】
に関わる概念

3.2【マンガと「物語」との類似】に関わる概念 / 3.3【物語特有の読解要素】に関わる概念 / 3.4
【マンガと「説明文」との類似】に関わる概念

第4節 モデル図の生成と考察

4.1 マンガ・リテラシー育成の必要性 / 4.2 物語スキーマや説明スキーマとの関連性 / 4.3 異なるメディア間を往還する「読みの方略」

第5節 本章のまとめ

第8章 マンガ教材を活用した国語科授業デザインの開発

第1節 研究の知見を踏まえたマンガ教材研究の流れ

1.1 各章で明らかになった知見の要点整理 / 1.2 授業デザイン開発に向けたマンガ教材研究
1.2.1 教材選定の基準 / 1.2.2 教材化の手立て / 1.2.3 読解技能の想定

第2節 マンガ教材を活用した国語科授業デザイン

2.1 想定する対象学年 / 2.2 マンガ教材 / 2.3 教材観 / 2.4 ねらいと教材化の手立て / 2.5 単
元計画
2.5.1 単元名 / 2.5.2 単元の目標 / 2.5.3 評価基準 / 2.5.4 評価基準の視座からの作品分析 /
2.5.5 本時の展開 (1/1)

第3節 本章のまとめ

第9章 研究の成果と課題

第1節 研究の成果

1.1 「言語主体の変容」に関わる知見 / 1.2 マンガ教材が誘発する「関心・意欲」の高まりに
関わる知見 / 1.3 「マンガと連続型テキストの読解における構成要素」に関わる知見 / 1.4
マンガ教材を効果的に活用する「授業デザイン」に関わる知見

第2節 今後の課題と展望

初出一覧

文献一覧

3 論文の概要

① 本論文における研究課題

ここで本論文全体の章立てと研究課題を確認する。第1章では「研究全体の目的や方向性、枠組み」を示した。第2章では、「具体的な研究方法」に関して言及を行う。

第3章から第5章までは「理論編」である。学際的な視座から児童文化に内在する「マンガを読むこと」を俯瞰的に捉え、意味付けを行う。また、先行研究から固有のマンガ作品に着目し、教材性を明らかにする。さらにマンガ研究の視座からマンガ理論を援用しつつ、文学作品を中心とする文字テキストとの読解過程の比較を行う。

第6章と第7章は「実践編」である。著者の勤務する私立小学校（東京都）における授業実践を中心に、学習者研究を通じて得られた知見を分析する。

第8章は「理論編・実践編のまとめ」となる。得られた知見を基にして、総合的な見地から国語科授業におけるマンガ教材を活用した授業デザインを提示する。

第9章は「研究全体の総括」ということで、本論文の成果と課題を明らかにした。

本論文の目的を達成するために、細分化した六項目の研究課題を設定した。第3章から第7章までは、それぞれ個別の研究課題の解決のための章となる。

以下、第3章から第7章で扱う研究課題ごとに整理をする。

第3章では「学校外で『マンガを読むこと』を通じて、どのような読書観が身に付くか」という課題を解明する。習慣化されたマンガを読むという行為が活字読書にもたらす影響を具体的に明示する。

第4章では「『ドラえもん』に固有の教材特性とは何か」という課題を解明する。マンガ教材を選定するためには一定の基準が求められる。まず児童文化との接続の観点から、新たなマンガ教材の選定基準を構築する。次に、藤子・F・不二雄『ドラえもん』（小学館、1974年）の教材性について検討を行う。『ドラえもん』が学習者に与える影響を多角度から掘り下げて研究を行うことで、教材性の実相を明らかにする。

第5章では、「文学作品に近似するマンガの教材性とは何か」という課題を解明する。先行研究の文学作品の読解に応用可能な「関係構築力」の定義に拠りながら、文学作品に転用可能な読解技能の実相を明らかにする。そのために、汎用性の高いマンガ理論を援用しつつ、国語教育研究における「読者論」の視座から、『ドラえもん』の分析を実施する。

第6章では、「マンガ教材で関心・意欲が高まる誘因とは何か」という課題を解明する。教材は「教材そのもの」の内容や質だけが、学習者を惹きつけるものではない。小学2年生を対象とする国語科授業でマンガ教材を扱った際の学習者の心情の在り様を分析する。学習者を惹きつける諸様相を図式化することで、新たな知見を確立する。

第7章では「マンガと連続型テキストの読解過程の共通点・相違点とは何か」という課題を解明する。小学4年生を対象とするマンガ教材を用いた国語科授業を通して、マンガと物語・説明文との読解過程を学習者自身が振り返り、比較する場を設ける。そこで得られた読解過程の構成要素をモデル化し、共通点・相違点を明示することとする。

第8章では「マンガ教材を効果的に活用する授業デザインとはどのようなものか」という課題を解明する。ここまでの章で得られた知見を踏まえつつ、マンガ教材活用モデルとしての授業プランを提示することで、国語科授業におけるマンガ教材開発の方向性を提示する。

② 本論文の概要

本論文の概要について、以下に章ごとに整理する。

第3章から第7章までに得られた知見は以下の通りである。第3章の目的は、マンガ読書を通じて醸成される読書観の実相を明らかにした上で、マンガ教材開発の方向性を明示することであった。結果として、現代社会には表層的に情報を取得する「消費的読書観」が蔓延しており、マンガの教材化には「熟考する過程」が必要なことが明らかになった。教材化の手立てによって、学校外でのマンガの読み方に変容が生じることが示唆された。

第4章の目的は二点あった。第一に、新たな観点からマンガ教材の選定基準を構築することである。第二に、作成をした基準に合致したマンガ教材を発掘することである。結果として、学習者に身近な娯楽性の観点からマンガ教材を選定することで、マンガに対する価値観が変容する可能性があること、また、学習者を取り巻く環境や作品独自の固有性を考慮すると『ドラえもん』が国語科教材にふさわしいことが明らかになった。マンガ教材の選定には、児童文化と学校教育の接続の観点が必要なことが示唆された。

第5章の目的は、文学作品に近接するマンガの教材性の実相を明らかにすることにあつた。結果として、マンガ研究と国語教育研究の読者論の視座から分析を行うと、表現構造や読解過程の観点で文学作品と共通する教材性を有していることがわかった。異なるメディア間における共通性の存在から、架橋する読解技能が示唆された。

第6章の目的は、国語科授業でのマンガ教材の活用において、学習者の関心・意欲が高まる具体的な誘因を明示することにあった。結果として、マンガの諸特性である構造上の特性・文化的特性・内容的特性（固有性）の三点が誘因として確認された。また、マンガのメディア特性以外にも教師の授業展開の工夫によっても関心・意欲が高まることが明らかになった。マンガ教材を効果的に扱う手立てにより、学習への取り組みがさらに向上することが示唆された。

第7章の目的は、マンガと連続型テキストとの読解過程の構成要素の共通点と相違点を明示することにあった。結果として、読解過程の構成要素においては、マンガのメディア固有の要素もあれば、マンガと物語、説明文の読解に共通する要素もあることが明らかになった。こうした分析結果から、別種のメディア間を横断する読解技能が存在することや、国語科教育におけるメディアの枠組みを超えた学びの可能性が示唆された。

本論文では、一定の教育的効果を担保する「マンガ教材を活用した国語科授業デザインの開発」を到達地点としていた。最終的に第8章では各章で得られた知見を整理し、国語科授業におけるマンガ教材研究の流れを提示するとともに、藤子・F・不二雄『ドラえもん』（第28巻、小学館、1983年）を活用した授業案を考案した。これは本論文の中核的な研究課題である「国語科教育に関わる資質・能力は、マンガ教材をどのように扱うことで育成できるのか」に対する答えとして位置付けられる。

③ 本論文の成果

本論文ではこれまでの国語教育研究で明示されていなかった知見として、著者は以下の四点の主な成果を挙げることができるとしている。

まず、日常的に親しんでいるマンガの教材化によって、消費的・娯楽的な読み方から脱却し、学校外でも熟考する過程を経て読んでいこうとする姿勢が確認された。第1章では、マンガ教材に関わる一つの課題として、授業後にどのような質的変容が生じるかという問いを掲げた。結果として国語科授業でのマンガ教材の活用によって言語主体の変容が生じることが示唆された。第3章では1970年代から「消費的読書観」が醸成されてきたことを指摘したが、こうした学習者の読書観が変化することを示しており、マンガ教材を用いた国語科授業における一つの教育的効果として位置付けることができる。

続いて、マンガ教材が誘発する関心・意欲の高まりに関わる知見を明らかにした。国語科授業でのマンガ教材の活用において、学習者の関心・意欲が高まる具体的な複数の誘因が明らかになった。多層にわたる誘因は大別してマンガの諸特性と授業展開の工夫の二点に集約された。

ページやコマ割りなどのマンガのメディア特性や、愛好するマンガの世界観やキャラクターの存在による影響を踏まえると、マンガでなければ生じなかった情感も存在していた。こうした事実は、マンガを教材として採用する一つの理由となると考える。また教材化にあたっては、マンガ教材の後半部分を隠して提示するという方法を採用した。結果として、その工夫が知りたい・考えたいという情感を生むことにつながったことが示された。

さらに本論文では、マンガと連続型テキストの読解における構成要素に関わる知見を明らかにした。マンガは文学作品に近接するメディアとして位置付けられてきた。研究を通じて、両メディアの間には、読解における構成要素にも共通性が見られることが明らかになった。あわせて、マンガと説明文の間にも読解における構成要素に共通性が認められることが示唆された。第7章で示したモデル図は読解技能の往還性を示しており、学習が横断的に展開される可能性が生じたと言える。今後の実証的な研究により、マンガ以外のメディアにも連続型テキストの読解における構成要素の共通性が認められれば、幅広いメディア選択が可能となり、新たな教育プログラムの実現につながると考える。

もう一つ、マンガ教材を効果的に活用する「授業デザイン」に関わる知見を明らかにした。第8章では、マンガ教材を用いた国語科授業デザインを提示した。これは本論文で得られた知見を総合的に合わせて構築されたものとして位置付けられる。よって、この授業デザインは国語教育研究だけでなく、マンガ研究をはじめとする他の学術分野の知見も踏まえた学際的な内容となっている。

本論文で生成したモデルは、方法論的限定を前提とする暫定的なモデルであり、今後はこのモデルを新たに量的研究などの立場から検証していく必要がある。本論文で生成されたモデルを土台として、さらに汎用性の高いモデルを構築する可能性が拓かれたことは、国語教育研究の分野におけるマンガ教材研究の発展につながる意義を有していると言えよう。

④ 本論文の課題

以上、四点の成果を整理・提示することによって、国語科教育でマンガ教材を扱う意義を明確にすることができた。最後に、本論文で残された二点の課題を確認する。

第一に、マンガと連続型テキストに共通する読解技能の転移の問題である。本論文では、マンガと他メディア間に共通する技能を転移させるための具体的な方法論の構築までは至らなかった。マンガの読解技能の転移に関しては、さらに実証的な研究が望まれる。

第二に、教材化における提示方法の問題である。本論文の授業実践では、最後のセリフやコマを意図的に空白にして教材化した。しかしながら一方で、他の提示方法を採用した場合には、結果も異なることが予想される。達成目標やねらいによって、提示の仕方を柔軟に変えることが重要であり、教材化の手立てに関する研究も必要になると考える。

4 総評

マンガを国語科の教材として取り上げた先行的な研究および実践は1970年代から見られるが、当時はまだマンガは教材としての市民権を得たものではなかった。2020年現在、本格的なマンガ研究が進められるようになり、マンガを教育に取り入れることへの関心は高まりつつある。特に国語科教育に関しては、マンガを読むという活動にことばの学びの機能を組み込むことが求められ、国語科で育成する資質・能力との関わりについての研究も期待されている。マンガを教育に取り入れた事例の報告は増えつつあるが、まだその方法論が確立される段階には至っていない。そのような状況下において、本論文は先駆的な研究成果として位置付けることができる。特に、国語科教育に関わる資質・能力は、マンガ教材をどのように扱うことによって育成できるのかという問題を踏まえた研究が展開された点は、本論文の注目すべき方向性であった。本論文では、初等教育の現場での実践に裏打ちされつつも、実践のみに依拠したものではなく、確かな理論的な枠組みを踏まえて論述されている点が評価できるものである。

国語科教育にマンガを取り入れるに際しては、主に以下の三つの点についての配慮が必要になる。その一つは、マンガと文学との相違を十分に理解することが求められる点である。例えばページ割やコマ割のようなマンガ独自の要素を踏まえて扱う必要がある。二つ目はマンガ・リテラシーをどのように育成するかという点である。そして三つ目として、「遊び」の教育化という問題がある。すなわち遊びながら学ぶこと、「学び」においても「遊び」を放棄しないことに配慮する必要がある。マンガのような学習者にとって楽しいはずのものであっても、学校という場所に持ち込まれることによって、楽しさが損なわれてしまうこともあることには注意しなければならない。本論文ではこれらの三点がそれぞれ踏まえられてはいるものの、例えば二点目の国語科授業で育成すべきマンガ・リテラシー

の方向性に関しては、より徹底した検証が期待される。

その他にも、本論文にはさらなる検討が必要な箇所も散見される。第1章では国語科授業でのマンガ教材の活用によって言語主体の変容が生ずることが示唆されているが、「変容」という表現は再検討が求められる。娯楽や遊びの中に学びを発見することを指摘するのであれば、「変容」よりはむしろ「新しい見方の獲得」として把握するべきではないかと思われる。第1章ではまた、マンガは子どもに人気があるという前提で論述されているが、2020年現在の子どもはYouTubeを初めとする動画共有サイトに親しんでいることから、マンガを読まなくなっているという状況も顕著になりつつあることなども勘案しなければならない。さらに第1章の冒頭で「学習漫画」というある意味で例外的なマンガジャンルに対する言及も必要であろう。本論文は学校外の「子ども文化」に存在するマンガを主たる研究対象としているが、「学習漫画」は学校図書館に広く所蔵が可能であって、ある意味で学校教育に最も近いジャンルということになるからである。

本論文では中核となる教材として、広く海外でも話題になっている藤子・F・不二雄の『ドラえもん』が挙げられている。『ドラえもん』を教材として国語科の授業に活用するという事例に関しては、主として結末の展開を想像するという方法が見られたが、コマのリテラシーを考える際には、コマの大きさやレイアウトなどに目を向けるという方向性もまた工夫する余地がある。特に今後はマンガ・リテラシーが高くはない子どもたちが増える傾向が想定されることから、内容だけではなくマンガ表現の問題への着目も必要になると思われる。そのようなコマのデザインなども含む側面の重視は、国語科の範疇を超えた美術教育の領域に属することになる。今後は教科横断的な授業の可能性を視野に収めることも検討される余地があり、それが新しい初等教育の可能性を拓くという側面にも目配りがほしいところである。

また今後に向けて、マンガ教材だからこそ育成できる読解の技能を「見ること」の観点から整理し、提起することが求められる。マンガ・リテラシーの問題をさらに深く追究して、コマの理解につながるリテラシー、そしてコマの連続から文脈を読み取るリテラシーへと繋ぐことも検討する必要がある。

以上のような課題が指摘できるものの、本論文全体の研究成果は総合的に十分に評価できるものであり、結論として審査員全員が岸圭介氏の本論文を博士（教育学）の学位授与にふさわしいものと認め、ここに報告する次第である。

以上